

# ヘブライ語聖書における疫病と神<sup>1</sup>

日 原 広 志

## 序

本論文はヘブライ語聖書における疫病と神の関係について考察するものである。2019年に発生し、翌年から世界的流行を続けた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、私たちの世界、社会、教会のあり方に深刻な打撃を与え、今もなお甚大な影響をもたらし続けている。このような時代に、あらためてヘブライ語聖書は疫病について何を語っているのかを概観したい。W・エプシュタインが『旧約聖書の医学』において「聖書のすべてのペスト流行も…まったく突如として民族に襲いかかり、彼らを根こそぎに絶やしてしまう疫病であったことは否定できない。といてこの疫病がどういう性格のものであったか、旧約聖書の提供する乏しい根拠から決めようとするのは、僭越な企てというべきだろう」<sup>2</sup>と語るように、医学的問題には立ち入らず、神学的考察に留める。コロナ危機下に旧約聖書を読みたいという現代人および教会のために、ヘブライ語聖書の疫病記事から疫病と神との関係性を明らかにし、今日の諸問題を理解する上で有益な使信と、現代への性急な適用には慎重であるべき留意点について考察することを目的とする。

---

1 訳注：これは2021年10月19日、Zoomオンライン会議方式で行われた2021年度後期西南学院大学公開講座「西南コミュニティーカレッジ」【学部等横断提供】「コロナ時代に神学は何を語るか」第一回「旧約学の立場から」における講演を加筆修正したものである。

2 W・エプシュタイン（梶田昭訳）『旧約聖書の医学』（時空出版、1989）、96-97頁。

構成としては先ず第一章で、ヘブライ語聖書における「疫病」という語がいくつあるのか、聖書に疫病記事はどれだけ、どこにあるのかについて概観する。ここでは「疫病」を意味する7つのヘブライ語名詞について語義を、元となる動詞の意味、さらに原意と共に確認する。さらに当該語のヘブライ語聖書における分布を表で確認し、登場章句を物語別、主題別に分類する。次に第二章では、「疫病」と神の関係について、特に示唆的と思われる章句に限定して物語別また主題別に積義的考察を行う。そして第三章では、コロナ危機下で現代人が旧約聖書の疫病記事を読む意義と、留意すべき点について明らかにしたい<sup>3</sup>。

## 第一章 ヘブライ語聖書における疫病

### 1 7つの「疫病」名詞

ヘブライ語聖書で「疫病」を表すのに用いられる名詞は7つある (דבר, נגע, נגף, מגפה, מכה, קטב, רשף)<sup>4</sup>。訳すと同じ「疫病」になる7つのヘブライ語名詞だが、原意や元になる動詞を聖書本文と照らし合わせることで、ニュアンスの違いを確認することができる<sup>5</sup>。なおנגףとנגפהは同語根 (נגף) のためまとめて記述する。

---

3 なお、「疫病」は「災い」と互換可能な語である。論者は過去に「ヘブライ語聖書における災害・苦難 - 新共同訳聖書の訳語『災害』『災い』『災難』『苦難』をめぐって -」『西南学院大学神学論集』第71巻第1号(2014, 3), 1-42頁において、本論が扱うヘブライ語の「疫病」術語(語根בכה, נגף, נגע)と章句のいくつかを論じているので適宜引用する。またその際は「災害」名詞だけでなく語根を同じくする動詞も考察対象にしたが、本論文では原則「疫病」名詞のみを扱う。

4 術語7つの絞り込みについては、Willem A. VanGemeren (ed.), *New International Dictionary of Old Testament Theology and Exegesis* Vol. 5 (Grand Rapids, Mich.: Zondervan Pub. House, 1997), p.143のIndex of Semantic Fieldsおよび、F. Brown, S. R. Driver and C. A. Briggs, *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon: with an Appendix Containing the Biblical Aramaic* (Peabody, Massachusetts: Hendrickson Publishers, 1997) (以下この旧約聖書ヘブライ語辞書をBDBと表記)による。

5 以下、原意についてはBDBによる語根の意味ならびに古代近東諸言語との比較による。

## (1) 6つの語根

## ①語根 דָּבַר 名詞デベル

- ・原意 「今いるところから去ること」「出発」「死」
- ・同語根の動詞 なし
- ・名詞デベルはヘブライ語聖書に49回登場し、「〔天罰と見なされる〕大厄災、〔致命的な〕伝染病、疫病、ペスト、悪疫」「家畜の病気、牛の伝染病」の意味を持つ「疫病」の最も一般的な語である。

## ②語根 נָגַע 名詞ネガア

- ・原意 「同意する、食べ物が体質に合う、効果をもたらす」
- ・同語根の動詞 ナーガア「触れる、手が届く、打つ」
- ・名詞ネガアはヘブライ語聖書に78回登場し、「打撃、疫病、しるし」の意味を持つが、*BDB* ではこのうち12回を「特に神罰によって送られたと見なされる病気 (のメタファーとしての打撃)」としている<sup>6</sup>。

## ③語根 נָגַף 名詞ネゲフ (נִגְף) とマッゲーファー (מַגֵּפָה)

- ・原意 「打つ、強打する」
- ・同語根の動詞 ナーガフ「打つ、強打する」
- ・名詞ネゲフはヘブライ語聖書に7回登場し、「一撃、打つこと」「(P 資料のみ) 判決に基づき打つこと」の意味を持つが、*BDB* ではこのうち6回を「致命傷、疫病」としている。
- ・名詞マッゲーファーはヘブライ語聖書に26回登場し、「一撃、屠殺、疫病」の意味を持つが、*BDB* ではこのうち22回を「神の審判としての疫病」としている。

## ④語根 נָחַה 名詞マッカー (מַכָּה)

- ・原意 「強打する、負傷させる、傷を負う」
- ・同語根の動詞 ナーハー (נָחַה)「打つ (私的暴力、公的懲罰、教育効果と様々)、強打する、打ち殺す、攻撃する、撃ち破る」

---

6 名詞ネガアについて、*BDB* では意味の分類上「疫病」と査定する 12 個には合せていないが、新共同訳が「疫病」と訳出している章句として箴言 6 章 33 節がある。

- ・マッカーはヘブライ語聖書に44回登場し、「一撃、打ち傷、大虐殺」の意味を持つが、*BDB*ではこのうち8回を「主の罰としての疫病」としている。

⑤語根קטב 名詞ケテブ

- ・原意 「切り落とす」
- ・同語根の動詞 なし
- ・ケテブはヘブライ語聖書に4回登場し、「荒廃」の意味を持つが、*BDB*ではこのうち3回を「疫病の結果としての荒廃」としている。

⑥語根רשע 名詞レシェフ

- ・原意 「怒気を含んだ」
- ・同語根の動詞 なし
- ・レシェフはヘブライ語聖書に7回登場し、「炎、激情、稲妻」の意味を持つが、*BDB*ではこのうち2回を「疫病と死をもたらす主の激情」としている<sup>7</sup>。

(2) 7つの名詞の射程

以上まとめて、名詞別の登場総数はデベルが49回と最も多く、次いでマッゲファー22回、ネガア12回、マッカー8回、ネゲフ6回、ケテブ3回、レシェフ2回の順である。「疫病」の合計は102回となる<sup>8</sup>。

特に原意に照らして以下の諸点を想定することが可能である。

- ①聖書の「疫病」デベルは死に至る恐るべき現実である。それは神との関係性の再確認と、今いるところからの出発へと向かわせる。
- ②聖書の「疫病」ネガアは、神が神意伝達のために触れることであり、しかし人間には神に打たれたとしか思えないという両義性を持ったものである<sup>9</sup>。

---

7 名詞レシェフについて、*BDB*では意味の分類上「疫病」と査定する2個には含まれていないが、新改訳が「疫病」と訳出している章句として詩編78編48節がある。このレシェフは複数形である。

8 このヘブライ語7名詞の他に、口語訳はマヴェト「死」(מוֹת)を6回「疫病」と訳出している(エレ15:2, 2, 18:21, 43:11, 11, ヨブ27:15)。新共同訳も43章11節については同様。また岩波訳はマドヴェ「病氣」(מַדוּה)を2回「疫病」と訳出している(申7:15, 28:60)。

9 「ヘブライ語聖書における災害・苦難」, 15頁参照。

- ③聖書の「疫病」ネゲフ／マッゲーフアーは神が一撃を加えて波を送ること。それは人間が先立って起こしていた波を顕在化させ、打ち消すために世界を覆うものである<sup>10</sup>。両語は交換可能であるが、ネゲフは原理的（波を起こすための初撃）、マッゲーフアーは現象的（波の広がり の可視化）を想定し得る場合もある<sup>11</sup>。
- ④聖書の「疫病」マッカーは物理的・社会的のちに直接加えられる打撃である。その打撃の帰結は死、傷痕、公的懲罰、教育効果など多岐に亘り得る<sup>12</sup>。
- ⑤聖書の「疫病」ケテブは切断、途絶、欠落、喪失、荒廃をもたらす。疫病の損壊させる威力と後に遺る深刻な状況と関係している。
- ⑥聖書の「疫病」レシェフは神の激情の雷である。瞬間的破壊力や致死性と関連している。

## 2 ヘブライ語聖書における「疫病」登場箇所

### (1) 登場箇所の分布

以下の表はヘブライ語聖書で「疫病」を表すのに用いられる7つのヘブライ語の名詞が、旧約聖書のどの書に出てくるかを示したものである<sup>13</sup>。その名詞が聖書に何回登場するかの数字の下に、そのうち旧約聖書ヘブライ語辞書 *BDB* が「疫病」と査定している数を太字で記している。名詞ごとに、書物別の登場回数を記し括弧内には章句を載せている。章句のローマ数字 I・II は上・下を表し、下線は複数形であることを示す。

10 同, 16頁参照。

11 同, 16-17頁における民数記 31章 16節とヨシュア記 22章 17節の比較、および出エジプト記 30章 12節と歴代誌上 21章 17節の比較に基づく。

12 同, 18-20頁参照。

13 表の作成は *BDB* ならびに Abraham Even-Shoshan (ed.), *A New Concordance of the Old Testament Using the Hebrew and Aramaic Text* (Jerusalem: "Kiryat Sefer" Publishing House LTD., 1993)に基づく。

表 ヘブライ語「疫病」名詞7種の分布

	デベル	ネガア	ネゲフ	マッゲーフアー	マッカー	ケテブ	レシェフ
単語の 登場総数	49	78	7	26	44	4	7
うち BDB 「疫病」 査定数	49	12	6	22	8	3	2
創世		1 (12:17)					
出エジプト	3 (5:3, 9:3, 15)	1 (11:1)	2 (12:13, 30: 12)	1 (9:14)			
レビ	1 (26:25)				1 (26:21)		
民数	1 (14:12)		3 (8:19, 17: 11, 12)	9 (14:37, 17:13, 14, 15, 25:8, 9, 18, 19, 31:16)	1 (11:33)		
申命	1 (28:21)				5 (28:59, 59, 59, 61, 29:21)	1 (32:24)	1 (32:24)
ヨシュア			1 (22:17)				
サムエル	2 (II 24:13, 15)	1 (II 7:14)		3 (16:4, II 24: 21, 25)	1 (14:8)		
列王	1 (18:37)	2 (18:37, 38)					
イザヤ		1 (53:8)					
エレミヤ	17 (14:12, 21:6, 7, 9, 24:10, 27:8, 13, 28:8, 29:17, 18, 32:24, 36, 34: 17, 38:2, 42:17, 22, 44:13)						
エゼキエル	12 (5:12, 17, 6: 11, 12, 7:15, 15, 12:16, 14:19, 21, 28:23, 33:27, 38: 22)						
ホセア	1 (13:14)					1 (13:14)	
アモス	1 (4:10)						
ハバクク	1 (3:5)						1 (3:5)
ゼカリヤ				4 (14:12, 15, 15, 18)			
詩編	3 (78:50, 91:3, 6)	4 (38:12, 39: 11, 89:33, 91: 10)		2 (106:29, 30)		1 (91:6)	
歴代	5 (I 21:12, 14, II 6:28, 7:13, 20:9)	2 (II 6:28, 29)		3 (I 21:17, 22, II 21:14)			

この表から以下のことが分かる。

- ① *BDB* が「疫病」と査定した名詞 7 種の登場書物は上下巻の区別をせずに 17 書である。
- ② 登場章句の分布に関しては、ヘブライ語聖書の三区分で言えば、律法では 5 書に 32 回、預言者（預言書）では 10 書に 50 回（前の預言者では 3 書に 11 回、後の預言者では 7 書に 39 回）、諸書では 2 書に 20 回となり、預言者が最も多い。
- ③ 各書別については、多い順にエレミヤ書（17 回）、民数記（14 回）、エゼキエル書（12 回）、詩編・歴代誌（10 回）、申命記（8 回）、出エジプト記・サムエル記（7 回）、ゼカリヤ書（4 回）、列王記（3 回）、レビ記・ホセア書・ハバクク書（2 回）、創世記・ヨシュア記・イザヤ書・アモス書（1 回）となる。
- ④ 「疫病」名詞は単数形で用いられることが多い。102 回中、複数形は 8 回（出 9 : 14, 申 28 : 59, 59, 59, 29 : 21, サム下 7 : 14, ホセ 13 : 14, 詩 89 : 33）だけである。
- ⑤ 「疫病」名詞が同節中に複数登場するのは、デベル&ネガア（列上 8 : 37, 歴下 6 : 28）、デベル&ケテブ（ホセ 13 : 14, 詩 91 : 6）、デベル&レシエフ（ハバ 3 : 5）、ケテブ&レシエフ（申 32 : 24）である。同語ではマッカー（申 28 : 59 に複数形で 3 回）がある。
- ⑥ 資料仮説に従い五書についてのみ見れば、ネガアは 2 件とも J である<sup>14</sup>。ネゲフとマッゲーフアーは P およびその影響を受けた編集者によるものが多く、より後代のテキストに多いとされる<sup>15</sup>。

14 資料の分類は石田友雄・木田猷一・左近淑・西村俊明・野本真也『総説旧約聖書』（日本基督教団出版局、1992）、210-214 頁「資料分析表 (A) (B)」及び H. D. Preuss, “*נָגַף* *nāgāp*; *נֶגֶפ*; *מַגְגְּפָא* *maggēpā*,” eds. G. J. Botterweck and H. Ringgren, *Trans.*, D. E. Green and D. W. Stott, *Theological Dictionary of the Old Testament IX* (Grand Rapids: Eerdmans, 1998), pp.210-213 (以下 *TDOT* と略記) による。その他について言えば、出エジプト記のデベル 3 回は J, 民数記のデベル 1 回は JE でマッカー 1 回は J, レビ記はいずれの語も H, 申命記はいずれの語も D である (D・P については表記を単純化)。なお出エジプト記 9 章 14 節については「資料分析表 (A)」では J となっているが、*TDOT* に従い P とした。これについては木幡藤子・山我哲雄訳『旧約聖書Ⅱ 出エジプト記 レビ記』（岩波書店、2000）、40 頁ならびに B・S・チャイルズ（近藤十郎訳）『出エジプト記 上 - 批判的神学的注解』（日本基督教団出版局、1994）、228 頁も参照。

15 Cf. Preuss, “*נָגַף* *nāgāp*; *נֶגֶפ*; *מַגְגְּפָא* *maggēpā*,” p.212.

(2) ヘブライ語聖書における「疫病」記事

1) 「疫病」の語が登場するもの

表の7名詞102回を物語や主題別(便宜上のものである)に整理すると以下ようになる。(単語の登場節番号については表を参照。なお、[]はBDBの査定にもかかわらず「疫病」とは言い難いもの)

<1> 物語

A アブラムのエジプト滞在(創12:10-20) נגע J 後述(第二章-4)

B エジプトの災い

①ファラオとの初会見(出5) דבר J 後述(第二章-7)

②第五の災い(出9:1-7) דבר J 後述(第二章-7)

③第七の災い(出9:13-35) מגפה, דבר J+Pへの最終的加筆  
後述(第二章-7)

④第十の災い(出11:1-3) נגע J<sup>16</sup> 後述(第二章-7)

⑤主の過越(出12) נגף P 後述(第二章-7)

→ エジプトの災いの回顧記事(サム上4:1-11 מכה,

詩78 דבר, アモ4:6-13 דבר)

後述(第二章-8)

C 荒野の40年における4度の疫病

①第一の疫病 キプロト・ハタアワ(民11:31-35) מכה J  
後述(第二章-8)

②第二の疫病 最初の土地侵入失敗(民14) דבר J or JE, מגפה P  
後述(第二章-6)

③第三の疫病 コラ, ダタン反抗後(民17:6-15) נגף, מגפה P  
後述(第二章-1, 6)

④第四の疫病 ペオルのバアル事件(民25) מגפה P 後述(第二章-1)

→ ペオルのバアル事件の回顧記事(民31:13-18 מגפה P編,  
ヨシュ22 נגף, 詩106 מגפה)

D 神の箱とペリシテ人(サム上6) מגפה

E ダビデの人口調査(サム下24, 歴上21) דבר, מגפה 後述(第二章-1, 6, 9)

← 人口調査の戒め(出30:11-16) נגף P編

---

16 資料分析表はJ, チャイルズはE, 岩波訳は「編集者ないし加筆者による」としている。

## 〈2〉不服従への警告

①不服従への呪い（レビ26, 申28-29） דבר, מכה 後述（第二章-8）

②レビ人の清めの儀式と任期（民8：15-22） נגף

③モーセの歌（申32） קטב, רשף 後述（第二章-1）

〔④教育刑（サム下7, 詩89） נגע〕

⑤剣, 疫病, 飢饉（歴下20, エレ14, 21, 24, 27, 29, 32, 34, 38, 42, 44, エゼ5, 6, 7, 12, 14, 28, 33） דבר 後述（第二章-9）

⑥ヨラム王家への警告（歴下21） מגפה

## 〈3〉病気への恐怖

①神殿奉獻（列上8, 歴下6-7） נגע, דבר 後述（第二章-1）

②忌避と差別（詩38, 39, [イザ53]） נגע 38のみ後述（第二章-5）

③死と疫病から救う神（ホセ13：12-14, 詩91） דבר, קטב 後述（第二章-3）

## 〈4〉敵国・異民族への疫病預言

①ハナンヤとの対決（エレ28） דבר 後述（第三章-2）

②マゴグのゴゲ（エゼ38） דבר

③ハバククの讃歌（ハバ3） דבר, רשף 後述（第三章-1）

④主の日の到来（ゼカ14） מגפה

## 2) 「疫病」の語が登場しないが伝統的に「疫病」記事とみなされるもの

①土葬できない遺体（アモ6：9-10） 後述（第二章-5）

②アッシリア軍大量死（列下19：35, イザ37：36）<sup>17</sup>③ヒゼキヤの病気（列下20：1-11, イザ38）<sup>18</sup>

17 月本昭男はヘロドトス『歴史』の記述を聖書の記述と安易に結合させることには方法論的問題があるとし、疫病が古代社会を襲った事例そのものはアッカド神話、アマルナ文書、アッシリア年代記などにある事実は認めつつも、一千年紀中葉までの資料にネズミにつく蚤が菌を広めるペストの記録は知られていないこと、仮にペストが起こったとしても「疫病」が猖獗をきわめるのは都市内であり犠牲者の大半はエルサレム住民でなければならなかったことなどから、郊外に陣をとるアッシリア兵の間だけにペストが蔓延したとは考えにくいとしている。月本昭男「なぜ、センナケリブはエルサレムから退却したか」『旧約学研究』第15号（2020）, 65-82頁参照。

18 エブシユタイン『旧約聖書の医学』, 95-96頁参照。

以上ヘブライ語聖書全体にわたっての「疫病」名詞登場章句と物語・単元また主題について概観した。これら全ての事例を扱うことは難しいので、特に今日に示唆的と思われる数点の主題と章句に絞って以下考察していきたい。次章の構成は以下の各編からなる。「1 疫病は死に至る恐るべきものである」「2 聖書の疫病は神との関連において理解されねばならない」「3 死に至るデベルから救い出す神」「4 神意伝達のネガエ」「5 病は神罰という理解 病者への差別と特異な葬り風景」「6 ネゲフ／マッゲエファーは人間が先立って起こしていた波を顕在化させ、打ち消すために世界を覆う波」「7 エジプトの災いにおける疫病名詞」「8 直接の打撃マッカーと動詞ナーハー」「9 飢饉、疫病」

## 第二章 ヘブライ語聖書における「疫病」と神の関係

### 1 疫病は死に至る恐るべきものである

現代人以上に古代人は疫病を恐れていた。ソロモン王の神殿奉獻の祈りに  
は古代近東世界に共通する災いのリストが保存されている。

#### 災いのリスト

この地に飢饉が起こり、疫病（デベル）がはやり、立ち枯れや赤さび病、  
群がるばったや、食い荒らすばったが発生し、敵がこの国の町を包囲し、  
あらゆる災い（ネガエ）、あらゆる病気が生じたとしても、（列上8：37）<sup>19</sup>

また聖書には疫病の死者数も記録されている。

#### 疫病死者数の記録

この疫病（かのマッゲエファー）による死者は、コラの出来事で死んだ  
者たちを除き、一万四千七百人であった。（民17：14）

---

19 以下、日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書 聖書協会共同訳』からのものである。但し、協会共同訳が「疫病」以外の訳語で、「疫病」と訳出している他の邦訳聖書がある場合はその章句のみ別訳を用いている。

この疫病（かのマッゲーフアー）で死んだ者は二万四千人であった。（同25：9）

そこで主はイスラエルに疫病（デベル）をもたらされ、イスラエルのうち七万人が倒れた。（歴上21：14）

これらの記録の統計的価値はともかく、先述した「まったく突如として民族に襲いかかり、彼らを根こそぎに絶やしてしまう疫病」<sup>20</sup>の被害の甚大さを象徴的に物語っている。古代では成人男性の数しか記録されないため、女性や子供の死亡を補ってその喪われた命の膨大さを想像することが不可欠となる。

モーセの歌には疫病とその後の継続的被害を思わせる描写がある。

#### 疫病の威力と後遺症を伝えるレシェフ&ケテブ

彼らは飢えて衰え／疫病（レシェフ）と破壊（ケテブ）は激しさを増す。

／私は獣の牙を／塵に這うものの毒と共に彼らに送る。（申32：24）

「疫病と破壊は激しさを増す」（岩波訳「熱病と烈しい悪疫による壊滅」）は原文では「…、そしてレシェフに喰われている、そして苦きケテブ、…」と災いが列挙されている。レシェフは落雷のような疫病の威力を表す。ケテブは被害、欠落、喪失、トラウマ、後遺症のような疫病に伴う精神的肉体的社会的なダメージを含意している可能性がある。

## 2 聖書の疫病は神との関連において理解されねばならない

コロナ危機を体験した私たちは、旧約聖書の疫病記述をコロナ前よりもはるかにリアルな迫りを以て読むことができるだろう。しかし、現代人が聖書を読む時には最低限知っておくべきヘブライ語聖書の特色がある。W・ブルッゲマンは『旧約聖書神学用語辞典』「災い（Plague）」の項で以下のように述べている。

---

20 エブシュタイン『旧約聖書の医学』, 96頁。

「一般的に、“plague”という用語は、特定の集団に蔓延する有害な伝染病を示唆するかもしれない。しかし、聖書ではそれはとりわけ、主権と審判の業として創造者によって引き起こされる環境の激変を指す。」  
「最も重要な点は、災いは神学的に、すなわち、YHWH との関連において理解されなければならないということである。……聖書物語に特有の意図…は、YHWH の支配に抵抗する被造物に対して、YHWH の主権を証言し実演するところにある。」<sup>21</sup>

「いくつかの災いには、敗北と解放をもたらすために、創造のあらゆる相を動員することのできる YHWH の力が提示されている。……こうした捉え方は、現代の読者に対して、イスラエルのレトリックの意図の内では災いを理解するように求めている。それは、これらの大混乱を「しるしと不思議」、つまり YHWH の統治のしるしと見なすようなレトリックなのである…」<sup>22</sup>

以下、この旧約の民の神学的レトリックとしての疫病と神の関係性、疫病を通しての神理解について確認したい。

### 3 死に至るデベルから救い出す神

詩編91編は「神に信頼する敬虔な人は神の特別の護りと祝福を得られることを説く教訓詩」である<sup>23</sup>。そこでは義人にとっての二大脅威が、敵対者からの罨と、疫病として語られる。

#### 死に至るデベル

まことに主はあなたを救い出してくださる。／

鳥を捕る者の網から／死に至る疫病（デベル）から。（詩91：3）

---

21 W・ブルッゲマン（小河信一訳）「災い（Plague）」W・ブルッゲマン（小友聡・左近豊訳）『旧約聖書神学用語辞典 響き合う信仰』（日本キリスト教団出版局、2015）、490頁。

22 同、491頁。

23 松田伊作訳『旧約聖書XI 詩篇』（岩波書店、1998）、259頁。

3節ではデベルが、その原意「今いるところから去ること」「死」にふさわしく、文字通り「死」(マヴェト)の語と結びつけられている。6節ではデベルとケテブが並行法で同節中に登場する。

### 疫病から守られる主

夜、脅かすものも／昼、飛び来る矢も／あなたは恐れることはない。

闇に忍び寄る疫病(デベル)も／真昼に襲う病魔(ケテブ)も。

あなたの傍らに千の人が／あなたの右に万の人が倒れようとも／

その災いがあなたに及ぶことはない。(詩91:5-7)

並行法でデベルは動詞ハーラフ「歩く」と、ケテブは動詞シャーダド「激しく破壊する」と結びつき擬人化されている。7節は「千の人」「万の人」によって、疫病のもたらす大量の犠牲を想起させつつ、疫病から救い得るのは主だけであることを強調している。

デベルとケテブの同節中並行はホセア書にも見られる。そこでも死と陰府を圧倒する主の主権が主題である。

### 死よ、お前の疫病はどこにあるのか(贖い出す主)

私が彼らを陰府の手から救い出し／死から彼らを贖うというのか。／

死よ、お前の災い(デベル複数)はどこにあるのか。／

陰府よ、お前の滅び(ケテブ)はどこにあるのか。／

憐れみはわが目から隠される。(ホセ13:14)

本文は難解である。エヒー「どこに」は「私はなるだろう」の語形だが、神が死／陰府に向かって「私はなるう、お前のデベル／ケテブに」と言うことは想定する文脈にそぐわないため、エヒーはアイイエ「どこに」の異形と考えられている。死と陰府、デベルとケテブ、主の行為ガーアル「贖う」とパーダー「救い出す」という3種の同義語がそれぞれ並行法を成している。いずれも交換可能であり、疫病が民の命を死へと奪い去ったとしても、死とよみをも支配できる神にとって疫病は何の力も持ち得ないので、そこから命を連れ戻すことができるという神の圧倒的主権が宣言されている。ヘブライ語聖書中ここでだけデベルは複数形になっている。同義的並行法であり同じ

疫病を表現するだけならデベルもケテブ同様に単数形に揃える方が自然である。多くの中世ヘブライ語写本では単数に変えられている。もし数の違いに意味があるとすれば、それは対応する主の動詞の違いの故であろう。共に「贖い出す」「買い戻す」を意味するガーアルとパーダーだが、パーダー「身代金を支払って身請けする、取り戻す」の力点は等価交換（対価を支払うこと）にあり、ガーアル「贖う、近親者として振る舞う」の力点は関係性（私その人の最も責任ある近親者ですと名乗り出ること）にある。つまり、陰府の手からパーダーされる人々は一括視され得るが、死からガーアルされるのは個人の複数事案である。それがケテブを単数に、デベルを複数にした理由かもしれない。

#### 4 神意伝達のネガア

アブラハムが妻を妹と偽るエピソードは創世記に2回登場する。エジプトのファラオに対して、名を変える前のアブラムが妻サライを妹と偽る話と、ゲラルのアビメレクに対してアブラハムが妻サラを妹と偽る話である。

##### アブラム、妻サライを妹と偽る — エジプトのファラオ (J資料)

ところで主はアブラムの妻サライのゆえに、激しい疫病（ネガア）をパロとその家に下され（ナーガア）た。（口語 創12：17）<sup>24</sup>

ファラオはアブラムを呼びつけて言った。「あなたは何とということをしたのか。なぜ、彼女が妻であると告げなかったのか。（協会 創12：18）

##### Cf. アブラハム、妻サラを妹と偽る — ゲラルのアビメレク (E資料)<sup>25</sup>

するとその夜、神が夢の中でアビメレクのもとに来て言われた。「あなたは、召し入れた女のゆえに死ぬことになる。彼女は夫のある身なのだ。」（同20：3）

---

24 創世記 12 章 17 節のみ引用は口語訳による。17 節の名詞ネガアについて新共同訳は「病い」、協会共同訳は「災い」と訳出している。

25 以下、章句引用における「Cf.」は、「疫病」7 名詞が登場しない節であることを示す。

アビメレクはアブラハムを呼んで言った。「あなたは何ということをしたのか。私があなたにどんな罪を犯したというのか。あなたは私と私の王国に大きな罪をもたらした。あなたはしてはならないことを私にしたのだ。」(同20:9)

創世記12章17節では「ネガアをナーガアする」という同語根 (נגא) の名詞と動詞を重ねて疫病の切迫した事態が強調されている。12章と20章のエピソードは、現地の王による「あなたは何ということをしたのか」という詰問を等しくしている一方で、12章の物語には、20章3節にはあった夢の中での神による王への真相暴露がない。資料批判的には、神と人との関係が直接的でなく、天使や夢を媒介する E 資料の特性として説明され得るものだが、間テクスト的に比較すれば、アビメレクにとっての“夢の中に神が来て、サラはアブラハムの妻だと明かしてくれた”体験に相当するのが、ファラオにとってのネガアの迫りであったことが分かる。ネガアは、神から見れば、神意伝達のために人間に触れることを意味し、しかしそれは人間から見れば、神に撃たれたとしか思えない状態を意味する。ネガアの原意の「触れる」と「打つ」の両義性がここでも確認される。

## 5 病は神罰という理解 病者への差別と特異な葬り風景

ネガアの両義性はしかし、人間が蒙った「打撃」「疫病」を、神が罰した証拠とみなす周囲の偏見や無理解を招き得る危険を内包している。

### 病者への差別

疫病(ネガア)にかかったわたしを／愛する者も友も避けて立ち／わたしに近い者も、遠く離れて立ちます。(新共同訳 詩38:12)<sup>26</sup>

詩編38編は「重病を神の罰と受け止めておのれの罪を告白し、その災いの故に隣人が敵となったさまを訴えて、救いをヤハウエに懇願する」詩である<sup>27</sup>。12節前半の本文は「なんと他ならぬ私の愛する者と私の友こそが、よ

26 詩編38編12節のみ引用は新共同訳による。12節の名詞ネガアについて協会共同訳は「病」と訳出している。

27 松田伊作訳『旧約聖書XI 詩篇』, 101頁。

りによって私のネガアと差し向いで [いること] から [離れて]、立つだろう」と二重強調で詩人の絶望を表現している。19節には「私は自分の過ち（アヴォーン）を告げ／罪（ハッタート）のためにおびえます」と告白されており、当時の社会でネガアが本人のハッタート「罪」、アヴォーン「過ち、咎」への神罰として理解されていたことを物語っている。

L・ケーラーは『ヘブライ的人間』の中で以下のように言う。

「病気が姿を現わす所では、どこでも共同体から締め出しをくう人間が出てくる。……隔離はどの病人に対してもなされるのである。彼は罪を背負っているのだという考え、彼の仲間になったり一緒にいたりすることは恥辱であり、自分も罪の疑いをかけられるかもしれないという思い、苦難にみまわれたのだから、その者は神に打たれたのだという確信 — もしもヘブライ人の健康と病について語ろうとするなら、こうした点をすべて考慮に入れ、その全体像を心に感じとる必要がある」<sup>28</sup>

イザヤ書53章「苦難の僕の詩」は疫病そのものを扱っている章句ではないが、3-4節で当時の人々による病者へのヘイトスピーチを遺しており、ネガアの元の動詞ナーガアが、カル分詞形ナゲーア「打たれ続けている」の形で使われている。

#### **Cf. 病気は神罰 苦難の僕への偏見**

しかし、私たちは思っていた。／彼は病に冒され（ナーガアされている）、神に打たれて（ナーハーされている）／苦しめられたのだと。（イザ53：4b）

疫病の語は登場しないが、アモス書6章9-10節も、疫病のもたらす戦慄すべき光景と、疫病が神から来るとの理解を保存している。

---

28 L・ケーラー『ヘブライ的人間』（日本基督教団出版局、1970）、65頁。

**Cf. 特異な葬り風景**

もし、一軒の家に十人残ったとしても、彼らは死ぬ。そして、その親族、すなわちこれを焼く者が、遺体を家の中から運び出そうとし、家の奥にいる者に尋ねる。「あなたと一緒にまだ誰がいるのか。」彼は「いない」と答え、「声を出すな、主の名を唱えるな」と言うであろう。(アモ 6:9-10)

土葬文化であった旧約の民が火葬という手段を取らざるを得ない未曾有の事態が疫病の蔓延を示唆している。当事者たちの会話は今日では理解が難しいが、弔いの時に守られていた禁忌と思われる<sup>29</sup>。A・ヴァイザーはこの断片を、「ヤハウエの日」をめぐるアモス書5章18-19節と20節の間に挿入し、「ヤハウエの日」の到来を楽観的に待ち望む批判者たちへの反論と考える<sup>30</sup>。

## 6 ネゲフ／マッゲファーは人間が先立って起こしていた波を顕在化させ、打ち消すために世界を覆う波

ネゲフ／マッゲファーとマッカーはどちらも「打つ」という動詞（ナーガフとナーハー）から派生している。敢えて違いに注目すれば、前者2名詞は打つことによって生じる波、波及、伝播、感染、蔓延と関係し、後者は標的を打つことによる物理的ダメージに関係している。

コラ、ダタン、アビラムの反抗の後の疫病記事にはネゲフとマッゲファーが共に登場する。

**疫病の広がりを表すネゲフ／マッゲファー**

モーセはアロンに言った。「火皿を取り、それに祭壇から取った火を入れ、香を載せ、急いで会衆のもとに行って、彼らのために贖いをしなさい。主の前から怒りが出て、疫病（かのネゲフ）が広まり始めたのだ。」アロンがモーセの言ったとおりにそれを取り、集まっている人々の中へ走って行くと、民の間に疫病（かのネゲフ）が広まり始めていた。アロンが

29 鈴木佳秀訳『旧約聖書X 十二小預言書』（岩波書店, 1999）, 109頁参照。

30 A・ヴァイザー（秋田稔・大島征二・大島春子訳）「アモス書」『ATD 旧約聖書註解(25) 十二小預言書上』（ATD・NTD 聖書註解刊行会, 1982）, 334-338頁参照。

香をたき、民のために贖いをし、死んだ者と生きている者との間に立つと、疫病（かのマッゲーファー）は治まった。（民17：11-13）

ネゲフは動詞ハーハル「汚染する」のヒフィル形ヘーヘル「始まる」（語形そのものは「他者に汚染をさせる」）と結びついており、この語が打って傷つけることよりも打って波が広がることを表わしていることが窺える。

ネゲフ／マッゲーファーは人間が先立って起こしていた波を顕在化させ、打ち消すために世界を覆う波である。最初の土地侵入の失敗では、フェイクニュースの蔓延という第一の波を、疫病という第二の波が打ち消す形になっている。

#### **最初の土地侵入の失敗**

その地の悪い噂を広めた者は、主の前で疫病（かのマッゲーファー）にかかって死んだ。（民14：37）

ダビデの人口調査では、130万の人口登録に対して7万の疫病死が起こされている。

#### **ダビデの人口調査**

ダビデは神に言った。「民を数えよと命じたのは私ではありませんか。罪があるのはこの私です。私が悪を行ったのです。この羊の群れがいったい何をしたというのでしょうか。わが神、主よ。どうか、あなたの御手が、私と私の父の家の下りますように。あなたの民を疫病（マッゲーファー）に渡さないでください。」（新改訳2017 歴一21：17）<sup>31</sup>

神は「七年間の飢饉／三月の敗走／三日の疫病」の三択と、ダビデの国づくりが将来的に織り込み済とする民の犠牲の規模と深さを、同じに見ている。公的權威に認可され合法的風景となった犠牲の再生産に対して、人々の感性は鈍麻しがちである。疫病はそれに先行していた人間の国づくりの中にある、疫病と同様にあるいはそれ以上に真剣に対処しなければならない問題や病理を顕在化させる側面を持つ。

---

31 新改訳2017による（新改訳第三版も「疫病」）。同節の名詞マッゲーファーについて口語訳は「災」、新共同訳は「災難」、協会共同訳は「災い」と訳出している。

## 7 エジプトの災いにおける疫病名詞

出エジプト記で最初に登場する「疫病」名詞は、主に遣わされたモーセとアロンがファラオとの初会見において言及するデベルである。

### 主の疫病はヘブライ人を襲う（懸念）

二人は言った。「ヘブライ人の神が私たちに現れました。どうか、私たちに三日の道のりをかけて荒れ野を行かせ、私たちの神、主にいけにえを献げさせてください。そうしなければ、主は疫病（かのデベル）や剣で私たちを襲うでしょう。」（出5：3）

5章3節末のデベルの部分は、同じJ資料で主がモーセに託した言葉（3：18）にはない。ファラオは5章1節で初めて「イスラエルの神、主」の名を聞かされ、2節で「私は主を知らない」と答え、主の主権を承認しないことを言明する。すると3節でデベルが登場する。エジプトの物語において疫病はファラオが主を知る（承認する）かどうかの指標となっている。

次は第五の災い（疫病）の家畜に対するデベルである。

### 主の疫病はファラオの家畜を襲う（事実）

主の手は、野にいるあなたの家畜、馬、ろば、らくだ、牛、羊の群れに極めて重い疫病（デベル）をもたらす。（同9：3）

デベルは、動詞ハーヤーとは結びつかず、本文は「見よ。主の手はあり続けている。野にいるあなたの家畜、馬、ろば、らくだ、牛、羊の群れの中に。〔すなわち〕極めて重い疫病」となっている。ここで動詞ハーヤー「ある、なる」はヘブライ語聖書中唯一の分詞形ハーヤーが使われている。分詞は現在行われていることだけを描写するもので、先がどうなるか不透明である。デベルは最初の言及で、モーセとヘブライ人を打つものとして危惧され、二度目はファラオとエジプトの家畜に臨み、徐々にファラオに近づいているのが分かる。

そして第七の災い（雹）に、マッゲーファーとデベルが続けて現われる。

### 主の疫病の全てがファラオとエジプトの全てに臨む

主はモーセに言われた。「朝早く起き、ファラオの前に進み出て言いなさい。『ヘブライ人の神、主はこう言われる。私の民を去らせ、私に仕えさせなさい。今度こそ私が、あなた自身とあなたの家臣と民に、あらゆる災い（私のマッゲーファー複数の全て）を送る。それによって、私のような者は地上のどこにもいないことをあなたは知るようになる。事実、私が今、手を伸ばしてあなたとその民を疫病（かのデベル）で打ち、地から滅ぼすこともできる。しかし、私があなたを生かしておいたのは、私の力をあなたに示し、私の名を全地に告げ知らせるためである。（同 9：13-16）

9章13節「私の民を去らせ、私に仕えさせなさい」という6度目の奴隷解放要求の直後に挿入された、「今度こそ私が」で始まる14-16節は、災禍一般を複数形で取り上げ、災禍の目的について語る後代の加筆とされる<sup>32</sup>。雹の災いに明らかにそぐわないので、14節のマッゲーファーは「疫病」ではなく「災い」と訳するのが相応しく、殆どの邦訳聖書もそうになっている。「私のマッゲーファー（複数形）の全て」は、主が疫病や被造物を総動員してエジプト全土に波及させる災い全般を包括的に指している。一方で、ここまで確認してきたように、遠く（ヘブライ人）から近く（エジプト人の家畜）へ、徐々にファラオに近づいていた「疫病」名詞を軸に見る時、「今度こそ私が、あなた自身とあなたの家臣と民に」の言い回しと共に登場する「災い」が、他の諸々の「災い」の類義語（ラーアーなど）でなく、「疫病」名詞マッゲーファーであったことは筋が通っている。その証拠に15節で三度目の登場を果たすデベルは、「かのデベル」と冠詞付きになっており、第五の災いの無冠詞のデベル（3節）を受けている。15節は、「事実ではなく単に可能性としてのみ、その過去における成就が説明されるべき行為・事実を表現するための完了形」<sup>33</sup>で、キー・アッター「実に今こそ」は「あの折には」と訳し、“<完了

32 木幡藤子・山我哲雄訳『旧約聖書Ⅱ 出エジプト記 レビ記』, 40頁参照。

33 Cf. A. E. Cowley, (ed.) *Gesenius' Hebrew Grammar* (Oxford: Clarendon Press, 1910), §106p.

文を〉やろうと思えば出来た、本当はあそこで終わっていた”とのニュアンスで囲むものである。本文は、「というのもあの〔第五の疫病の災いの〕折には、〈私が手を伸ばした〔ままでいて、家畜に続いて〕、そしてそれからあなたを、そしてあなたの民を、かのデベル（家畜へのデベル）で打ってしまって（ナーハー）、あなたはその地から滅ぼされてしまった〉ということも起こり得たから」となる。上述した9章3節のヘブライ語聖書中唯一の動詞ハーヤーの分詞は、15節の真相開示の伏線となっている。

14節後半「それによって、私のような者は地上のどこにもいないことをあなたは知るようになる」から、出エジプトに至る一連の災いは、ファラオと主との“どちらが真の神か”をめぐる勝負であったことを示す。これが14節前半に置かれるべき災いと疫病を同時に意味し得る語群（נגע, נגף, מגפה, מכה）の中から、特にマッゲーファーが選ばれた理由であろう。ファラオも現人神として国づくりをする中で何らかの波を起こしてきた筈であり、“どちらの神の繰り出すマッゲーファーの方が波及力、伝染力において上か”が、真の神と疑似神の勝負の指標となったのである。こうして、ヘブライ人奴隷に「叫ぶ声」（彼らのツェアーカー）（出3：7）を挙げさせていたファラオの国づくりに対して、疫病をはじめ被造物を用いてエジプト社会へ波及蔓延させる災い全般が「複数のマッゲーファーの全て」という波状攻撃でカウンターされ、ファラオも含めた全てのエジプト人が「悲痛な叫び」（大いなるツェアーカー）（出12：30）を挙げることになったのである。それ故、出エジプト記における神のマッゲーファーは、ファラオはエジプトにどのような波を起こして来たのか、いかなる甘受を波及させ、いかなる無責任を伝染させ、いかなる諦観を蔓延させてきたかの検証へと私たちを向かわせる機能を持っている<sup>34</sup>。T・E・フレットハイムは、「ファラオの反生命的な方策は神の創造の意図を脅かすカオスの勢力を解放した」とし、「災いの神学的基礎づけは、世の正義と幸福のために神が道徳的秩序を創造した、と理解することである。ファラオの道徳的秩序は破綻をきたし、この神の意図をひどく混乱させ、またそ

34 出エジプト記9章14節におけるマッゲーファーの機能については拙論「ヘブライ語聖書における災害・苦難」、17-18頁参照。

のようにしてファラオは神の命令に含まれる裁きの対象になる」と論じている<sup>35</sup>。

第十の災い（初子）をめぐる疫病名詞はネガアとネゲフである。これらも「災い」と訳される。

#### 初子の災い 初言及なのに追加のネガア

主はモーセに言われた。「私はファラオとエジプトの上にさらに一つの災い（ネガア）を下す。この後、ファラオはあなたがたをここから去らせる。彼があなたがたを去らせるとき、あなたがたをここから一人残らず追い出すことになる。（同11：1）

#### 主の過越 創造論的な波の境界づけ

あなたがたがいる家の血は、あなたがたのしるしとなる。私はその血を見て、あなたがたのいる所を過ぎ越す。こうして、エジプトの地を私が打つ（動詞ナーハー）とき、滅ぼす者の災い（ネゲフ）はあなたがたには及ばない。』（同12：13）

出エジプト記初の疫病名詞ネガアであるが、主は「さらにもう一つのネガア」と言っている。これ以前も主がファラオにしていた神意伝達を最後にもう一度行うとの含みであろうか<sup>36</sup>。12章13節では、打つ行為そのものではなくそれが広がり直接打たれていない側にも伝染する側面をネゲフで表現していると思われる。自然現象なら及ぶ筈の波が及ばないとの確証は、術語的一致はないが「ここまでは来てもよいが、越えてはならない」（ヨブ38：11）のように、境界線を定めて秩序づける神の創造行為を連想させる。上述のフレットハイムによる指摘（ファラオの国造りが被造世界をカオスに戻していた）と共に、主の過越は、新しい創造への参与として位置づけられていることが窺える。

---

35 T・E・フレットハイム（小友聡訳）『出エジプト記』（現代聖書注解）（日本基督教団出版局, 1995）, 168, 170 頁。

36 「ヘブライ語聖書における災害・苦難」, 15 頁参照。

## 8 直接の打撃マッカーと動詞ナーハー

「エジプトの十の災い」はマッコート・ミツライム（エジプトのマッカー複数）と呼ばれる。既述の通り、疫病名詞マッカー自体は出エジプト記には登場しない。しかし動詞ナーハー「打つ」が頻繁に登場しているため、後の伝承においてはマッカーも使われている。

### Cf. 初子を打つ 動詞ナーハー

その夜、私はエジプトの地を行き巡り、人から家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち（ナーハー）、また、エジプトのすべての神々に裁きを行う。私は主である。（出12：12）

### マッカーとして認知された出エジプト

大変なことになった。あの強力な神の手から我々を救える者があろうか。あの神は荒野でさまざまな災い（マッカー）を与えてエジプトを撃つた（ナーハー）神だ。（サム上4：8）

ちなみに五書に限定して、動詞ナーハー「打つ、強打する、打ち殺す」の登場数を計上すると、以下の通りである。

エジプト人がヘブライ人に対して行ったナーハー 3回<sup>37</sup>

主を主語とするエジプトに対するナーハー 10回<sup>38</sup>

モーセを主語とするエジプトに対するナーハー 2回<sup>39</sup>

アロンを主語とするエジプトに対するナーハー 3回<sup>40</sup>

電を主語とするエジプトに対するナーハー 4回<sup>41</sup>

37 3回の内訳は暴力2回（出2:11, 5:14）と報告1回（出5:16）である。

38 主を主語とするナーハー10回の内訳は予告4回（出3:20, 7:17, 12:12, 13）、過去の可能性としての不実行1回（出9:15）、実行2回（出7:25, 12:29）、回顧3回（民3:13, 8:17, 33:4）である。

39 モーセを主語とするナーハー2回の内訳は実行1回（出2:12）、回顧1回（出17:5）である。

40 アロンを主語とするナーハー3回の内訳は予告1回（出8:12）、実行2回（出7:20, 8:13）である。

41 電を主語とするナーハー4回の内訳は実行3回（出9:25, 26, 31）、否定1回（出9:32）である。

出エジプト後、主の怒りの罰としてイスラエルに向けられたナーハー  
10回<sup>42</sup>

出エジプトまでに主のエジプトに対する行為とされたナーハーと、出エジ  
プト後に主の怒りの罰としてイスラエルに向けられた（あるいは備えられた）  
ナーハーが共に10回と釣り合っているところが興味深い。

#### キプロト・ハタアワ 主によるイスラエルに対する最初のナーハー

肉がまだ歯の間にあって、かみ切られないうちに、主は民に対して憤り  
を發し、激しい疫病（マッカー）で民を打たれた（ナーハー）（新共同訳  
民11：33）<sup>43</sup>

出エジプト記においてエジプトに適用されなかった名詞マッカーが、神の  
民イスラエルには複数形の三重表現で突きつけられている。

#### 主によるイスラエルに対するマッカー

主はあなた（のマッカー複数）とその子孫に激しい災い（マッカー複数）  
を下される。災い（マッカー複数）は大きく、久しく続き、病もまた重  
く、久しく続く。（申28：59）

後の世代の者たち、すなわち、あなたがたの後に続く子孫や、遠くの地  
から来た外国人も、その地に主が下された災い（マッカー複数）と病を  
見て言うであろう。（申29：21）

## 9 剣、飢饉、疫病

いつの時代にも変わらぬ人類にとっての脅威である戦争、飢餓、疫病は、  
ダビデの人口調査に対する審判においても類似の三択が迫られていたが、預

---

42 10回の内訳は荒野の40年における出来事として、キプロト・ハタアワ（民11:33）、  
最初の土地侵入の失敗（民14:12）、ペオルのバアル事件（民25:14, 15, 18）の5回、将  
来に向けられたものとして、律法における祝福と呪い5回（レビ26:24、申28:22, 27,  
28, 35）である。

43 民数記11章33節の引用は新共同訳による。33節の名詞マッカーについて協会共同  
訳は「災い」と訳出している。

言者たちによって主による処罰の典型「剣、飢饉、疫病」として威嚇の定型表現として用いられた。

#### 飢饉、敗走、疫病（人口調査における主への信頼の欠如として）

「行ってダビデに告げなさい。主はこう言われる。『私はあなたに三つの選択肢を示す。そのうち一つを選ぶがよい。私はそれをあなたに行う。』」  
ガドはダビデのもとに来て、彼にこう告げた。「七年間の飢饉があなたの国を襲うことか。三か月間、敵の前を逃げ回り、敵に追われることか。三日間、あなたの国に疫病（デベル）が起こることか。私を遣わされた方にどのようにお答えすべきか、よく考えて決めなさい。」（サム下24：12-13）

「剣、飢饉、疫病」という三重の災いのリスト（順番は様々）を用いた預言は、南王国滅亡期の二大預言者エレミヤとエゼキエルによって、あたかも非常ベルが鳴り響くように多用された。しかし両者のニュアンスには大きな違いが見られる。

#### 剣、飢饉、疫病（捕囚を受け入れない者への恫喝的警告として）

この都にとどまる者は、剣と飢饉と疫病（かのデベル）によって死ぬ。しかし、出て行って、あなたがたを包囲しているカルデア人に降伏する者は生き、その命は戦利品となる。（エレ21：9）

#### 剣、飢饉、疫病（律法違反と偶像礼拝への審判として）

主なる神はこう言われる。手を叩き、足を踏み鳴らして、あなたは言え。ああ、イスラエルの家のあらゆる忌むべき悪事のゆえに、彼らは剣と飢饉と疫病（かのデベル）によって倒れる。遠くの者は疫病（かのデベル）で死に、近くの者は剣で倒れ、生き残って守られた者も飢饉で死ぬ。こうして私は彼らに対し憤りを燃やし尽くす。（エゼ6：11-12）

エゼキエルの場合は、祭司的伝統に立って預言していたこともあり、「剣、飢饉、疫病」を、南王国の律法違反と偶像礼拝という大きな罪に対する審判として、いわば決定事項として宣告している。これに対してエレミヤの場合は、その種の文脈は1回だけ（エレ32：24）で、殆どは、神の経綸としての

バビロン捕囚を受け入れない者への恫喝的警告として三重のリストが用いられている。つまり捕囚を甘んじて受ける、それによって神への信頼を示す方向へ心を入れ替えたなら蒙る心配のない呪いとして、いわばよき将来を得るための招きとして告げられる点、大きな違いがあると言える。

エレミヤが「疫病」の位置を一つ上げて、「剣、疫病、飢饉」の形（エレミヤとしては唯一）としている箇所がある。

#### **剣、疫病、飢饉（奴隷解放の不履行への審判として）**

それゆえ、主はこう言われる。あなたがたが私に聞き従わず、それぞれ自分の同胞や隣人に解放を宣言しなかったので、私はあなたがたに剣、疫病（かのデベル）、飢饉に渡す解放を宣言する。――主の仰せ。私は、あなたがたを地のすべての王国のおののきとする。（エレ34：17）

エレミヤ34章17節は、もう一つのユニークな理由として、南王国支配層が、奴隷解放をいったん公約しながら後に反故にしてしまったという社会的不正義を挙げている。債務奴隷に零落する同胞を自業自得・自己責任として救済せず、格差拡大を推し進めていた富裕層に対する批判は、アモスも北王国に対して行っており、先述〔第二章-5〕の土葬できない遺体をめぐるアモス6章の恐怖のビジョンも、そうした格差社会の帰結として預言されたものの一つであった。疫病に対する根本的予防は被抑圧者の即時解放にあるという主題は、出エジプト記9章13節への14-16節の加筆〔第二章-7〕においても展開されていた。

### **第三章 コロナ時代に旧約聖書をどう読むか**

ここでは、コロナ危機下で現代人が旧約聖書の疫病記事を読む意義と、留意すべき点について考えたい。

## 1 どう読むか、旧約聖書

### (1) 全てのものは神から来る

信仰の有無を問わず、“光と平和は神から来るが、闇や災いは悪魔から来る”という善悪二元論的発想は広く流布しているかも知れない。しかし、こうした二元論は旧約の信仰には本来なかったもので、捕囚以降、バビロニア、ペルシアなどの世界帝国の宗教から導入されたものである。

#### Cf. 闇も災いも神から来る

光を造り、闇を創造し／平和をもたらし、災いを創造する者。わたしが主、これらのことをするものである。(イザ45:7)

旧約の民の信仰においては、全てのものは神から来るのであり、当然、疫病もまた神から来るものである。

#### 疫病は神の従者

疫病(デベル)は御前を進み／熱病(レシェフ)がその後ろに従う。(ハバ3:5)

ハバクク書では疫病デベルとレシェフを神の従者として描写している。

しかしこうした考えを現代にそのまま適用することには、いくつかの危険性があることを留意しなければならない。

### (2) 危険性と留意点

#### 1) 天罰／神罰／運命論に陥る危険性

これらは、犠牲者への安直で冷酷な査定や、疫病災害の生み出す種々の現実に対する無関心へとつながりかねないものである。この危険性を回避するには以下の視点が有益となろう。

- ① 神のかたちとして創造された人間に滅びてよい命は一つもないという原点に立つ。
- ② 被害の実相へのリアルな想像力・共感力を以て聖書を読む。
- ③ 聖書に繰り返される「思い直す神」の姿に学ぶ<sup>44</sup>。

---

44 サムエル記下24章16節、歴代誌上21章15節、ヨナ書4章2節、アモス書7章等。

## 2) 善悪二元論に陥る危険性

これは、救われる側と滅びる側、神に愛されている側とそうでない側といった分断とレッテル貼りを犯しかねないものである。この危険性を回避するには以下の視点が有益となろう。

- ①救いは神の自由な主権の行為であり、人間が予見できるものではない。
- ②誰一人指定席にいない、という謙虚さを以て、未曾有の困難に共同性と畏れを以て対峙する。(Cf. 本論第二章-5のアモス6章)
- ③聖書にある「外国・他民族への疫病預言」を批判的に読み解く。(後述)

## 3) 「これだから旧約の神は…」という理解で終わる危険性。

三つ目は、新約の神は愛と赦しの神、旧約の神は義と審判の神という旧態依然とした二分法に捉われたまま、旧約聖書に対してある種、諦めてしまうことである。この危険性を回避するためには、私が恩師や先輩牧師から異口同音に学んだ以下の視点が有益になると思われる。

- ①物わかりよくなならない。神に忖度しない。現代人の倫理観・価値基準からは受け入れがたい旧約の記述に対して覚える違和感や反発に蓋をしない。
- ②神を被告席につけて告発してよい。「主よ、なぜなのですか」と異議申し立てをしてよい。神は公正と正義に基づき対話を求める人間を喜ぶ。
- ③神の理不尽と不条理を思い切り問うた後で、「本当にその時犠牲者と共にいることを貫徹したのは誰か」に思いを馳せる。
- ④「共におられる神」「共苦する神」を再発見する。
- ⑤神に挑んだまさにその同じ熱量をもって、空気のように当たり前となった社会構造の中に恒常化している犠牲のシステム、非人間化、被造世界への蹂躪についても「あってはならないこと」と感じる感性を取り戻す。

## 2 敵国・異民族への疫病預言の相対化

- (1) エレミヤ書28章のハナンヤとの預言対決に「戦争、災害、疫病」のリストが登場する。

### 敵への疫病預言は需要があった

昔からあなたや私に先立つ預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病（デベル）を預言した。（エレ28：8）

このエレミヤの証言から、職業預言者団は昔から、為政者や民衆の気に入られるように、敵国が疫病被害に見舞われるという預言を度々繰り返していたことが窺える。一方で、聖書にはそうした預言は殆ど収録されていないという第一章で確認した事実がある。つまり、当時好評を博したであろう愛国的・民族主義的預言を、聖書は遺そうとしなかったのである。

- (2) 諸外国への審判を連ねるいわゆる諸国民への預言集（イザ13-23, エレ46-51）には、「疫病」名詞が登場しない<sup>45</sup>。
- (3) 主が疫病で敵国を滅ぼして下さるとの預言は最後期のものが多い。これらは、現実には抵抗する術を持たない者の黙示的希望の表現であり、それ故に聖書に遺されたと考えられる。
- (4) 上述〔第二章-8〕したように主がエジプトに下したナーハーと主がイスラエルに下したナーハーはいずれも10回で釣り合っている。

これらから、神を自家薬籠中のものとし、疫病を自国の軍事兵器として利用できるかのごとき預言は、神を道具化する罪として聖書には収録されなかった可能性が高いと思われる。このことは、善悪二元論的に疫病を扱うことを戒めるであろう。

### 結論に変えて コロナ時代に旧約は何を語るか

最後に考察を通して得られた今後の課題について列挙したい。

- ①「疫病は神のわざ」という旧約の信仰は現代への適用には慎重であらねばならない。それが差別や分断，社会的無関心，宗教的独善と断罪につながる読みが求められる。

---

45 「疫病」7名詞としてはマッカーがイザヤ書14章6節、エレミヤ書49章17節、50章13節に登場するが、いずれの意味も「疫病」とは査定されていない。またイザヤ書19章22節の動詞ナーハー「打つ」を疫病とみる説もある。

- ②聖書の疫病記事は以前には宗教的に不信仰・不従順な側が自業自得で滅びた物語として読まれがちであったかも知れない。しかしコロナ時代にあつては、よりレッテルを貼らずに被害と犠牲、そこに至った相互の誤解やコミュニケーションの失敗を丹念に読むことで有益な示唆を獲得し得る。
- ③危険性をわきまえつつ、「全てのものは神から来る」とした旧約の信仰は、光と闇の二元論的信仰への批判的再検討を促す可能性を持つ。
- ④膨大な犠牲を軽んじての思索遊戯に陥ることなく、ネガアの持つ「神意伝達のために触れる」という射程と、ネゲフ／マッゲーフアアの持つ「人間が起こしていた波を顕在化し打ち消すための神の波」という射程は、コロナ時代に先んじて私たちがどのような世界や社会を作り出すことに加担し、あるいは放置していたか、の気づきへと私たちを導き得る。
- ⑤全ての被造物を総動員する主の主権の行使としての災いは、人間中心／至上主義を超えた被造物、生態系を含めた平和と救いについて示唆を与える。
- ⑥苦難の僕の詩にナーガア、ナーハー、ネガアと訳はともかく「疫病」術語が3つあることは、イエス・キリストへの新たな視点を教会に与えるかも知れない<sup>46</sup>。
- ⑦「主の過越」から教会の主の晩餐式に「外界の切迫感」「新しい創造に参与」という（イエスの晩餐にも共通する）文脈の再発見。被造世界の回復と和解のビジョンと共に。
- ⑧「ダビデの人口調査」が問い直す土地取得・会堂建築・献堂式など。

#### 参考文献

Brown, F., S. R. Driver and C. A. Briggs. *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon: with an Appendix Containing the Biblical Aramaic*. Peabody, Massachusetts: Hendrickson Publishers, 1997.

---

46 イザヤ書 53 章 4 節「彼が担ったのは私たちの病／彼が負ったのは私たちの痛みであった。／しかし、私たちは思っていた。／彼は病に冒され（ナーガア）、神に打たれて（ナーハー）／苦しめられたのだと。」8 節「不法な裁きにより、彼は取り去られた。／彼の時代の誰が思ったであろうか。／私の民の背きのために彼が打たれ（ネガア）／生ける者の地から絶たれたのだと。」

- W・ブルッゲマン（小河信一訳）「災い（Plague）」W・ブルッゲマン（小友聡・左近豊監訳）『旧約聖書神学用語辞典 響き合う信仰』（日本キリスト教団出版局, 2015）, 490-493 頁.
- B・S・チャイルズ（近藤十郎訳）『出エジプト記 上—批判的の神学的注解』日本基督教団出版局, 1994.
- Cowley, A. E. (ed.) *Gesenius' Hebrew Grammar*. Oxford: Clarendon Press, 1910.
- W・エプシュタイン（梶田昭訳）『旧約聖書の医学』時空出版, 1989.
- Even-Shoshan, Abraham. (ed.) *A New Concordance of the Old Testament Using the Hebrew and Aramaic Text*. Jerusalem: "Kiryat Sefer" Publishing House LTD., 1993.
- T・E・フレットハイム（小友聡訳）『出エジプト記』（現代聖書注解）日本基督教団出版局, 1995.
- 日原広志「ヘブライ語聖書における災害・苦難—新共同訳聖書の訳語『災害』『災い』『災難』『苦難』をめぐって—」『西南学院大学神学論集』第71巻第1号（2014, 3）, 1-42 頁.
- 石田友雄・木田献一・左近淑・西村俊明・野本真也『総説旧約聖書』日本基督教団出版局, 1992.
- 木幡藤子・山我哲雄訳『旧約聖書Ⅱ 出エジプト記 レビ記』岩波書店, 2000.
- L・ケーラー『ヘブライの人間』日本基督教団出版局, 1970.
- 松田伊作訳『旧約聖書Ⅻ 詩篇』岩波書店, 1998.
- Preuss, H. D. "נָגַף nāgāp; נֶגֶפַע negep; מַגְגֵּפָה maggēpâ." Eds. G. J. Botterweck and H. Ringgren. Trans. D. E. Green and D. W. Stott. *Theological Dictionary of the Old Testament* IX. Grand Rapids: Eerdmans, 1998, pp.210-213
- 鈴木佳秀訳『旧約聖書Ⅹ 十二小預言書』岩波書店, 1999.
- 月本昭男「なぜ、センナケリブはエルサレムから退却したか」『旧約学研究』第15号（2020）, 65-82 頁.
- VanGemeren, W. A. (ed.) *New International Dictionary of Old Testament Theology and Exegesis*. Vol. 5 Grand Rapids, Mich.: Zondervan Pub. House, 1997.
- A・ヴァイザー（秋田稔・大島征二・大島春子訳）「アモス書」『ATD 旧約聖書註解（25）十二小預言書上』ATD・NTD 聖書註解刊行会, 1982, 247-410 頁.